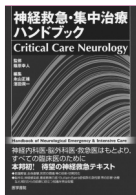


書 評

● 金澤 一郎 (国立精神・神経センター総長)

神経救急・集中治療ハンドブック

Critical Care Neurology



監修：篠原 幸人
編集：永山 正雄，濱田 潤一

A 5 頁 496 2006 年
定価 5,775 円 (本体 5,500 円 + 税 5%)
[ISBN 978-4-260-00132-8] 医学書院刊

われわれが医師になったのはちょうどインターン闘争から大学紛争に拡大していく時期であった。そこで「患者のためになる良い医療を」という旗印の下で、青年医師連合を結成した。医師とは関係のないところで政治的に活動していた仲間もいたが、われわれノンポリは医師国家試験をボーイコットした非合法的なインターンとして医療の世界に飛び込んでいった。すでに医師として社会で働いていた先輩たちの技術や知恵を授けてもらいながら医療に邁進した。実に充実していた。中でも、いわゆる救急には心をときめかした。自分こそがこの患者を救うのだ！ という心意気に燃えていた。ただ心意気だけでは救えないので、いざというときはすぐに先輩に聞けるように「連絡網」を作成していた。救急医療は、医師になりたての身には格別の魅力があった。さしもの大学紛争も少し落ち着いた頃、大学に戻り、患者の受け持ちになってみると、病室で急変した患者に対応する先輩たちの動作の鈍いのにあきれた。しかし、今思えばその頃がわれわれの一般医療の腕前としてはピークだったように思う。頭で反応するよりも体が反応していたような気がする。

ところで、神経疾患の医療については、診断が

難しいだけでなく治療も明確なものがなくて医師としてやりがいがない、などと心ないことをいう人がいまだにいるので困る。神経学領域にも、脳卒中、頭部外傷、てんかん性痙攣、重症筋無力症のクリーゼ、などの本格的な救急症例はあるし、急性脳脊髄膜炎やギラン・バレー症候群なども急いで対応する必要がある。脳卒中以外の疾患は幸いにもあまり多いものではないが、決して侮れるものではない。命にかかわる。自分の経験でも、幸いにも助けることができた場合もあるし、残念ながら力が及ばなかったこともある。

このたび、私の尊敬する篠原幸人先生監修による神経救急と集中治療に関する本格的な教科書が上梓された。この本が、わが国における神経救急の初めての専門書である、と聞いてその事実ビックリした。以前から神経救急の必要性を説かれていた篠原先生が、米国で神経救急を本格的に学んでこられた永山・濱田両先生を編者に据えてまとめ上げられたものである。神経内科医は無論のこと、脳外科医、救急医などあらゆる領域の臨床医の必携の書である。かゆいところに手が届く、とはまさにこの本の読後感であった。悪性症候群、spinal emergency、などを一つの章として扱っているのはユニークでありプラクティカルでもある。内容も極めて充実している。本書のもう一つの特筆すべき点は、終章に「精神疾患におけるDo-Not-Resuscitate(DNR)と脳死」と題して、社会的にも注目すべき課題について、そのエッセンスを学べるように編纂されていることである。DNRはいわゆる尊厳死と共通部分をもった考え方であり、わが国でも十分議論する必要がある。いろいろ学べる書であり、考えさせる書でもあり、臨床医にとって必読の書である。